



TITLE:

京大広報 No. 601

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 601. 京大広報 2005, 601: 1921-1940

ISSUE DATE:

2005-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196494>

RIGHT:



# 京大広報

No. 601

2005. 5

## 目次

### 〈大学の動き〉

新入生向けガイダンスの実施……………1922

### 〈部局の動き〉

化学研究所附属先端ビームナノ科学センターレーザー

科学棟竣工記念見学会・祝賀会の開催……………1922

医学部附属病院に総合臨床教育・

研修センターを設置……………1923

地球環境学堂がベトナムに

教育研究拠点を開設……………1923

畠山重篤氏、C.W.ニコル氏を

“社会連携教授”に迎える……………1924

### 〈寸言〉

あの先生の一言 岡田武彦……………1925

### 〈随想〉

退職に思う 一多くの恵みに導かれて一

名誉教授 山崎 稔……………1926

### 〈洛書〉

地域へのまなざし・地域からのまなざし

前平泰志……………1927

### 〈栄誉〉

加藤和也教授が恩賜賞・日本学士院賞を、

中村卓史教授が日本学士院賞を受賞

勝又直也助教授、望月新一教授が

日本学士院学術奨励賞を受賞……………1928

長尾 真前総長、竹市雅俊客員教授が

日本国際賞を受賞……………1930

木村健二教授が文部科学大臣表彰科学技術賞  
(研究部門)を、4名の教員が若手科学者賞を受賞

……………1931

成宮 周教授が紫綬褒章を受章……………1932

〈日誌〉……………1933

〈訃報〉……………1934

### 〈話題〉

京都大学附置研究所シンポジウムを開催……………1935

人文科学研究所が第1回

「TOKYO漢籍SEMINAR」を開催……………1935

高等教育研究開発推進センター「第11回

大学教育研究フォーラム」の開催……………1936

第1回京都大学・大阪大学合同イベント

一大学が変わる みんなで変える一の開催……………1937

医学部附属病院で「看護師が自ら看護服を

デザインし着用」……………1938

### 〈公開講座〉

法学研究科21世紀COEプログラム

連続市民公開講座……………1938

### 〈お知らせ〉

上海センター・シンポジウム

日中間の“政令経熱”をどう打開するか……………1939

大学院生のための教育実践講座

一大学でどう教えるか……………1939

平成17年度創立記念行事音楽会の開催……………1940

〈編集後記〉……………1940



第1回京都大学・大阪大学合同イベント  
一大学が変わる みんなで変える一  
一関連記事 本文1937ページ

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

### 新入生向けガイダンスの実施

本学では、教養教育の改善・充実のための取り組みとして4月4日（月）、5日（火）及び6日（水）の3日間、全学部（10学部）の新入生2,939名を対象とした「全学共通教育に係る新入生向けガイダンス」を開催した。

今回で3回目を迎えたガイダンスは、遠隔講義システムにより4会場同時進行で行われ、はじめに、高等教育研究開発推進機構長の丸山正樹副学長が、本学の教育課程及び「自由の学風」に根ざした教育理念、さらには学生個々人の自学自習を基本精神とした教養教育の目的・目標等を紹介した。引き続き、副機構長の林 哲介教授から、総合大学としての特徴を生かして各学部、研究科、研究所及びセンターが提供する936科目に及ぶ多様な全学共通（教養）科目について、その選択の仕方や適正な履修方法の

詳細な説明があった。

その後、事務担当者による履修に当たっての事務手続き、学生に対する支援、図書館の利用などについて説明があった。新入生はメモをとるなど真剣な表情で聞き入り、ガイダンスは好評のうちに終了した。



## 部局の動き

### 化学研究所附属先端ビームナノ科学センター レーザー科学棟竣工記念見学会・祝賀会の開催

化学研究所は、昨年4月に先端ビームナノ科学センターを発足させ、ビーム科学の融合とナノ科学応用研究への展開を始めた。この度、これらの研究を一層発展させるために、レーザー科学棟が宇治キャンパスのイオン線形加速器実験棟に隣接した場所に竣工した。

建物竣工及びレーザー装置の設置完了を記念して、



3月17日（木）「レーザー科学棟竣工記念見学会・祝賀会」が同施設で行われた。見学会ではレーザー物質科学研究領域担当の阪部周二教授の案内により、参加者は防塵服を着衣してレーザー室とレーザー照射室を見学した。レーザー装置を運転しながら、レーザー光を水の入ったセルに集光し白色光を発生したり、照射室でも集光容器の中の大気中に集光するなどのデモも行われた。ひきつづき祝賀会が行われ、高野幹夫化学研究所長の挨拶に続き、来賓の井澤靖和大阪大学レーザーエネルギー学研究センター長と木村豊秋日本原子力研究所関西研究所光量子科学研究センター長より祝辞が述べられた。さらに、宇治地区を代表し、松本 紘生存圏研究所長から祝辞と乾杯があり、参加者の歓談や情報交換が盛んに行われた。最後に野田 章先端ビームナノ科学センター長より今後の研究活動への支援と協力をお願いがあり、盛況裏のうちに閉会となった。



今後は、本施設を活用し、短パルスレーザーナノアブレーションによる金属・誘電体材料などの微細構造自己形成や、生体組織・細胞分子の短パルスレーザーによるソフトイオン化と質量分析科学への応用、レーザー生成放射線発生とそのナノ解析科学への応用などの研究を本格的に実施する。また、異分野交流による新学術創成を目指して、幅広い分野での新たな共同研究を歓迎している。

(化学研究所)

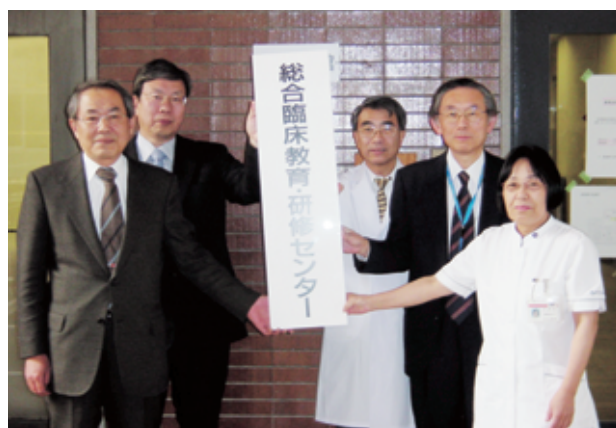


照射室にてデモ実験の説明をする阪部教授(左)と見学者

## 医学部附属病院に総合臨床教育・研修センターを設置

医学部附属病院では、医師・歯科医師、薬剤師及びコ・メディカルの臨床教育・研修機能を一元化するため、総合臨床教育・研修センターを設置し、4月1日(金)に開所式を行った。同センターでは、地域の医療技術者養成機関・医療施設等におけるキャリア・アップの中核施設として、全人的医療を実現できる医療人の育成、地域医療に貢献できる医療人の育成及び専門的高度医療技術の研修を目的に特色ある研修プログラムを作成し、実施することとしている。

開所式では、内山 卓病院長から挨拶の後、千葉勉センター長から設置の趣旨と今後の運営体制及び中村孝志副センター長から設置に至る検討経過について報告が行われた。



看板を掲げる左から、久本事務部長、中村副センター長、千葉センター長、内山病院長、嶋森看護部長

(医学部附属病院)

## 地球環境学堂がベトナムに教育研究拠点を開設

大学院地球環境学堂はこのほど、ベトナム国ハノイ市のベトナム科学技術アカデミー(Vietnam Academy of Science and Technology: VAST)の環境技術研究所(Institute of Environmental Technology: IET)内に教育研究拠点を開設し、4月1日(金)に、在ベトナム日本大使館香川孝三公使、VASTのDang Vu Minh総裁(大臣)、IETのNguyen The Dong所長他、多数のご来賓の参列を得て、開所式を執り行った。

開所式はVAST内の会議場で執り行われ、「Contact Office Graduate School of Global Environmental Studies (GSGES), Kyoto University」の看板を上掲し、本学から地球環境学堂松井三郎教授他、インターン研修として当拠点に1年間滞在して、研究活

動に取り組む予定の大学院地球環境学堂環境マネジメント専攻博士課程2回生の原田英典氏、河井紘輔氏や、協力企業である株式会社クボタ、



ベトナム拠点の看板

株式会社荏原製作所、栗田工業株式会社およびEbara Vietnam Corporationの代表など6名が出席した。また、ベトナム側からは、科学技術省、資源環境省、保健省、ハノイ土木工科大学、ハノイ科学大学などの多数の代表が参加した。今後期待される地球環境に関わる教育研究に関する活動について、

特にこの1～2年はベトナムの衛生対策および廃棄物管理に関する研究に重点を置いて取り組むことを紹介し、香川公使から京都大学の当地での活動への期待等の言葉があった。VASTのMinh総裁からは、今後の活動への期待と共同研究の推進に対する謝辞が述べられた。

多くのベトナムの研究者との交流を深め、共同してベトナムの衛生対策および廃棄物管理に関する研究を実施することによって、京都大学およびVASTのより活発な交流へと発展し、ベトナム教育研究拠点から多くの研究成果が発信されることを期待している。



前列左2人目から Dong所長, Minh総裁, 香川公使, 松井教授  
(大学院地球環境学堂)

## 畠山重篤氏, C.W.ニコル氏を“社会連携教授”に迎える

フィールド科学教育研究センター(フィールド研)は、日本の国土の根幹をなす森と川と海の本来のつながりの再生を通じて、地球環境問題解決のブレークスルーとなり得る新しい統合学問領域「森里海連環学」の創生に向かって、多様な取り組みを進めてきた。それらの中で、自ら森と海のつながりの再生を目指した森づくりを進め、世論形成にすでに大きな力を発揮されている先人との共通認識の形成や今後の相互協力の合意を得ることとなった。

これらの社会的連携を、さらに効果的に教育・研究・社会貢献へ結びつけるために、“森は海の恋人運動”を展開されている宮城県気仙沼の漁師畠山重篤氏(牡蛎の森を慕う会代表)と長野県信濃町に“アフアンの森”を築き、日本の美しい自然の危機と保全を訴え続けておられる作家C.W.ニコル氏に、3月1日ならびに4月1日付で、京都大学フィールド科学教育研究センター「社会連携教授」(非常勤)に就任いただいた。これにより、東北地方と中部地

方に新たな教育研究拠点を持つこととなり、森里海連環学の全国展開に道を開くこととなった。

両教授には、フィールド研の全学共通教育の講義の一部を担っていただくとともに、豊かな自然を再生しつつある室根山-大川-気仙沼湾ならびに黒姫山ろくのアファンの森を舞台に、ポケットセミナーや森里海連環学の実習を開くことを計画している。自らの考えを行動に移し、社会を動かす賢人に接すること、そしてその舞台となる豊かな自然環境に触れることは学生各々の“原体験”として、かけがえない教育効果を持つものと期待される。さらに、研究面では森里海連環学の市民参加型研究を二つのフィールドで継続的に展開することを計画している。社会連携教授は、フィールド研が目指す新しい学問領域の開拓にとって不可欠の存在であり、学問と社会を結びつける上で大きな役割を担っていただけるものと期待している。

(フィールド科学教育研究センター)



畠山ご夫妻(中央)を囲んで



田中センター長から辞令を受けるC.W.ニコル氏



## 寸言

## あの先生の一言

岡田 武彦

最近の日本の若者の学力低下が大きな社会問題になり、ゆとり教育から学力強化教育に戻るとのニュースを耳にするとき、そんなことだけで学力向上が図れるかどうかと疑問を抱いているのは、私だけではないでしょう。



私が京都大学の修士を修了した昭和45年頃は学生運動が激しく、昭和44～45年に掛けては、時計台が占拠され大学全体が殺伐とした雰囲気、修士の修了証書も学科の事務所で受け取った年でした。その当時の学生運動は、現在では考えられないほど過激であり、本当に革命的に日本を変えられるのではないかと感じさせられ、多くの学生がこの運動に引きつけられました。しかし、学生の武力闘争の力の無さは百万遍交差点での機動隊との交戦を見たとき、これまで「武力革命」と称してきた事が何だったのかと、ノンボリの私には強い疑問が湧きました。

そんな時期の学生生活でしたが、物事の見え方あるいは人生観は京都大学によって築いて貰ったように感じています。

汚れた実験着で、汚い、臭い、ごちゃごちゃした研究室で毎日、夜遅くまで実験に明け暮れて、大学の4回生から修士2回生までの3年間を過ごしました。今は大変綺麗に改装され法科大学院に生まれ変わった旧「工化総合館」が我が学舎でした。ここで学んだ多くのことが、今も走馬燈のように頭の中を巡っています。

走馬燈の絵の一つは、大学卒業の時に教室主任をされていた三枝武夫先生のお話です。正直に言って、大学4回生を卒業すると言っても、まだ修士として京都大学にいるわけですからあまり感慨もなく、三枝先生のお話を聞いていました。全体の話は忘れてしまったのですが、「君たちはこれから化学で飯を食って行くのです。化学のプロなのです。」とまづおっしゃいました。この言葉が心に非常に強く残りました。社会人になっても「自分はケミストなのだ」ということをいつも心の中で反芻して来ました。修

士を修了して東レ株式会社に入社し、研究開発を長く担当して来ましたが、自分が京都大学で学んだ有機合成化学の分野で知恵を出し、企業人として、また個人として成果を出そうと常に思っていました。

最近、一流と言われる大学を出た若手の方々の中に、基礎学力の面でも、また、対人関係に於いても、「アレッ」と疑問を抱かざるを得ない人の数が増えています。三枝先生のお話のもう一つのポイントは、「最近、学歴社会ではなく実力社会になるべきだと言われているが、これは学歴のある人が実社会において力を発揮していないからである」とお話になりました。この言葉は、私の人生に大きな影響を与えました。会社で仕事をするときには、常に周りの人の目線に合わせて行動しましたが、仕事のレベルでは一段上になれるように努力して来た積もりです。結果がどうであったかは分かりませんが、三枝先生の言葉を心にいただきながら生活できたことは本当に良かったと思える今日この頃です。

研究活動そのものは、小田良平先生、田伏岩夫先生に指導いただきました。特に、田伏先生は非常にエネルギーに研究を推進され、多くの事を教えていただきました。その中でも、凡才の私も研究生活をやって行けるかもしれないと思わせて貰った言葉があります。周りの素晴らしい先生方を見て、「あんなに何でも知っている人でないと、大きな研究成果は上がらないのじゃないか」と私が聞いたことがあります。その時、田伏先生は「あまり多くのことを知っていると、それに囚われて良い研究は難しいよ」と言われました。今から思うと、凡才の私に対してはそうとしか答えられなかったのだと思いますが、その時は「それなら自分も出来るかもしれない」と元気が出たものでした。この言葉に騙されて研究活動に心底惚れてここまでやって来れました。

京都大学で勉強をさせて貰ったことに感謝と誇りを持ち、精一杯実社会で頑張れる人をより多く京都大学から輩出いただける事を心から願っています。

(おかだ たけひこ 東レ株式会社 理事 瀬田工場長 昭和45年工学研究科合成化学専攻修士修了)

## 随想

## 退職に思う 多くの恵みに導かれて一

名誉教授 山崎 稔

私は平成11年、事情により停年1年前に京大から近畿大学に転勤し、この3月末日に退職した。これを機に、私の人生に大きく影響した事柄を振り返ってみる。



高校2年の2月、父が急逝した。商売の負債の上に、姉を筆頭に子供4人の養育が母の肩にかかった。経済的に到底大学進学は望めない状態であったが、父の知人から受験だけでもしてみたらどうかとの助言を頂いた。修学旅行でバスの窓から見た京都大学を目標にした。店の手伝いの傍ら受験勉強に追われていた3年の夏、高校の先輩、当時は静岡大学学長、京都大学初代農学部長の大杉 繁先生にお会いできる機会に恵まれた。先生は京都大学について話された後、私の眼を覗き込むようにして「ぜひ、農学部に行きなさい」と勧めて下さった。

合格通知を受けた時はうれしかった。しかし、学資のあてはなく就職する準備を進めていた。そこへ、小学校以来の友人のお父上から学資を貸していただける人を紹介して下さい、加えて地元企業の奨学金を受けられる幸運に恵まれた。これに日本育英会からの奨学金を当て込んで、何とか進学への道が開けたのであった。

宇治分校から京都に移った頃から、宗教に関心をもった。あまりにも急に父を失ったことから命のかなさを痛感したことと、理性のみで生きていくことへの自信のなさが支配していたように思う。仏教、天理教、キリスト教と関心が移っていった。そのような時、同志社女子大学の栄光館でキリスト教について矢内原忠雄東大総長の講演があった。「キリストを信じたが故に現在の私がある」とのお言葉は今も耳に残っている。こうした経験から得られたものは、いずれの宗教でもまず信じることが第一にあり、

信じればその行き着く先の境地に到達できるということと、正対すべきは経典であるということであった。結局は自我が強いためであろう、行き先が明白でないものに自分を委ねることができなかった。しかし、信仰者への理解は深まったように思う。

印象深い講義を二つあげる。山本修二先生の「演劇学」で、実に巧みな話法で演劇のルーツ、その本質、面白さを堪能させて頂いた。教職について私にとって講義の理想像となった。もう一つは、大橋保夫先生の仏文クラスで履修したジードの「狭き門」であった。信仰への矛盾・煩悶は当時の私の問題であっただけに、心に残る内容の授業であった。

3年生から学科に所属するため何人かの先生の教授室をお訪ねした中で、農業工学科農業機械学担当の田村 豊先生との出会いに恵まれた。今記憶に残っている光景……。お体の割には大きな頭が眼前にあり、もう1時間以上も説明が続いている。学問内容に続き卒業した方々の就職先、活躍など、資料を前に丁寧な説明が続く。そして時折、顔を上げてこちらを見られ、眼を細めて微笑まれる。これほど長時間、私のために貴重なお時間を割いて下さっていることに感激し、専攻を決めた。

小学校以来、私を導いて下さった先生方をはじめ、多くの先輩のご指導、友人・後輩のご支援は筆舌に尽くせず、感謝あるのみである。そして、これまでに受けた恩恵に比し、どれほどの恩返しできたか、恥じ入るばかりである。中学の恩師から頂いたダビントの「師に勝るなきは恥すべきの弟子なり」の言の前に、唯頭を垂れるのみである。

幸い健康で、山歩きを楽しむつもりである。今後は木の国、和歌山の地から、森林管理システム、バイオマス利用技術の進展を期待して見守りたいと思っている。

(やまざき みのる 元農学研究科教授 平成11年退官、専門は農業システム工学)

## 洛書

## 地域へのまなざし・地域からのまなざし

前平 泰志

私にときどき自転車に乗って挨拶をしてくれる年配の女性がいる。キャンパス内でのことである。私はそのたびごとに、もちろん挨拶を交わすのだが、その人が誰であるか最初のうちは正直言って見当がつかなかった。何回かの後で、ようやく気がついた。時々私の髪を刈ってくれる散髪屋さんの女将さんだったのだ。その女性から夜遅く構内を歩いていた時、「総長選挙どうになりましたか？」と尋ねられたのには、驚いた。ちょうどその日は総長の選挙の日で、しかも第2次投票だとか3次投票だとかで足止めを食っていたからである。大学の構成員でなくても、京都大学について一挙手一投足に注目してくれる人たちがいることに不思議な気持ちを覚えるとともに、感謝したい気持ちにもなった。私が感謝してもどうなるものでもないが、このような経験がいくつかあって、私は、案外こういった人たちが隠れたファンとして京都大学を根っここのところで支えているのではないだろうか、と思うようになった。

私は、お昼は弁当を持参しているので、機会は少ないが、学生たちがよく利用している近くの食堂や喫茶店に行って昼食をとったり、また夜は夜で、会議や仕事が長引いて、一杯飲みに行くこともなくはない。10年以上もたつと、このような途切れ途切れではあっても顔を合わす機会がふえて、段々知り合いになり、街なかで出会っても声をかけてくれるのは嬉しいことである。

昨年3月、私の講座の主催でシニアキャンパスという試みを実験的に行った。その際に、京大周辺で生まれ育ち、今はなくなったが「ナカニシヤ」という書店（年配の人ならご記憶にあるだろうが）に勤めていた女性が応募してくれた。彼女は参加者の一員に選ばれた時、「宝くじに当たったより嬉しい」と



最大の喜びを表明してくれた。

京都大学はあまり地域と連携しないし、地域貢献を果たそうとする認識は低いと一般的に言われている。大学の使命は学問、研究であり、その研究は究極的には人類の幸福につながるものであるという考えから、地域社会への貢献等は、いきおい二の次になる。それは、廻りまわってめぐってくる結果であっても、何かその成果を直接地域の人たちに還元しようという気持ちは、なかなか起きてくるのは難しい。おそらくそのように考えておられる先生方は少なくないであろう。とはいえ、大学の周辺の人からみれば、案外とても温かいまなざしで見守られているというのは、知らないのではないだろうか。だが私はこのような好意のまなざしに胡坐をかいてはいけないと思う。

入試の際など『京都大学の関係者以外ご遠慮ください』などという立て札やステッカーを見ることがあるけれども、そのたびごとに首をかしげるときがある。もちろんそれについて異議申し立てするつもりは、さらさらないのであるが、私自身、果たして関係者なのだろうか、と自問することがある。京都大学を構成しているのは、教員と学生、そして大学の職員や生協の職員だけではない。そこにはいろいろな人がこのキャンパスを文字通り行き来している。その意味で、法人化のプラスの側面なのだろうか、「カンフォーラ」のカフェテラスができて、学生や教員のみならず、地元の人、観光客、修学旅行生など行きかう人々が談笑しているのを見るのは、心が和む。秋に大学主催のシニアキャンパスを本格的に立ち上げる予定で、現在その準備に鋭意努力中であるけれども、このような企画を契機として大学が、もっと、もっと拓かれていってほしい。

（まえひら やすし 大学院教育学研究科教授、専門は生涯教育学）



## 栄誉

### 加藤和也教授が恩賜賞・日本学士院賞を、中村卓史教授が日本学士院賞を受賞 勝又直也助教授、望月新一教授が日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、加藤和也理学研究科教授が恩賜賞・日本学士院賞を、中村卓史理学研究科教授が日本学士院賞をそれぞれ受賞されることになりました。また、「日本学術振興会賞」を受賞した25名の若手研究者の中から、我が国の学術の発展に寄与することが特に期待される者5名以内に与えられる日本学士院学術奨励賞を勝又直也人間・環境学研究科助教授と望月新一数理解析研究所教授が受賞されることになりました。

授賞式は、6月中旬日本学士院で行われる予定です。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介しします。

加藤和也教授は、昭和50年東京大学理学部を卒業、同大学大学院理学研究科修士課程を同52年に修了し、同大学理学部助手となり、同55年理学博士号を取得後、同57年同大学理学部講師、同59年同大学理学部助教授、平成2年同大学理学部教授、同4年東京工業大学理学部教授、同9年東京大学大学院数理科学研究科教授を経て、同13年京都大学大学院理学研究科教授に就任し、現在に至っている。

加藤教授の専門は、有理数体上定義された代数多様体の整数論の研究で、数論幾何学と呼ばれる。

加藤教授はまず、代数的整数論の最高の結果である類体論を高次元の体に拡張した。一部齋藤秀司氏との共同研究によりアーベル拡大のガロア群の明示的記述を与え、代数的整数論の古典的結果の高次元化を明らかにした。ついで、分岐理論の高次元化においては、セールのアルティン表現の存在予想を2次元の場合に解決し、齋藤毅氏との共同研究で、ブロッホの導手公式など、高次元エタールコホモロ



ジーの基本的な問題について決定的な成果を挙げた。

$p$ 進ホッジ理論の研究においては、一部兵藤治氏との研究で、フォンテンが定式化したCst予想のかなりの部分を解決し、この結果はこの分野の基礎となった。

代数多様体のL関数の特殊値の研究においては、ブロッホ氏との共同研究により、 $p$ 進ホッジ理論を用いて精密な予想を定式化し、これをリーマンゼータ関数について示した。さらに、保型形式のL関数について、オイラー系を用いて保型形式の岩澤主予想を部分的に解決し、バーチ-シンナートン-ダイアー予想の $p$ 進類似の一部を導くなど画期的な成果を挙げた。これは、数論幾何学の最新理論を駆使するものであり、世界的に非常に高い評価を受けている。

log幾何の研究は、 $p$ 進ホッジ理論の基礎研究として始められたが、一般の退化の研究等に広い応用を持つことを明らかにした。

このように、加藤教授は、数論幾何学の重要な諸問題について、多岐にわたる真に独創的な業績を挙げ、世界の数論幾何学研究に指導的役割を果たして来られた。これらの業績に対し、昭和63年日本数学会賞、平成8年井上學術賞、平成14年朝日賞が授与された。  
(大学院理学研究科)

中村卓史教授は、昭和48年に京都大学理学部を卒業、同50年同大学大学院理学研究科修士課程を修了、同53年同博士後期課程を単位取得退学、同年博士の学位を取得、同56年12月に京都大学理学部助手に着任、同63年1月に



講師に昇任。同年11月に高エネルギー研究所（KEK）助教授となり、平成2年7月には京都大学基礎物理学研究所教授、そして、同14年4月に大学院理学研究科物理・宇宙物理専攻の教授となり、現在林忠四郎現名誉教授、佐藤文隆現名誉教授の後を受け天体核研究室を主宰する。

中村教授はその大学院生時代に世界に先がけいち早く、「星の重力崩壊の結果としてブラックホール

が形成されるときの時空構造を一般相対論の基礎方程式であるアインシュタイン方程式を数値的に解くことにより解明する」という問題に関心を抱き、京都数値相対論グループを組織してこの問題に取り組んだ。その基礎研究をもとに中村教授は様々な技術的困難を克服し、世界ではじめて軸対称ブラックホール形成のシミュレーションに成功した。1990年には、この業績で西宮湯川記念賞を受賞。更に、中村教授はこの研究を3次元計算へと拡張する研究を進め、現在の数値相対論といわれる分野の基礎をつくると同時に、その分野をリードする後身の育成という点においても優れた業績を残している。更に、ブラックホール時空の摂動を計算するための基礎方程式（佐々木-中村方程式）の導出をおこなうなど解析的な研究においても顕著な業績がある。

その一方で、平成3年度から平成6年度にわたり文部省科学研究費重点領域「重力波天文学」の領域

代表として日本の重力波干渉計プロジェクトの創成に中心的な役割を果たした。その後も文部省科学研究費創成的新プログラム方式による「干渉計による重力波検出研究」（平成7年度-13年度）、及び、文部科学省科学研究費特定領域A「重力波研究の新展開」（平成13年-17年度）において理論グループ代表を務め、日本の重力波研究の推進に大きく貢献してきた。

さらに、中村教授はガンマ線バーストに代表される種々の天体現象の研究においても世界をリードする活躍をしている。ここにそれらについて紹介する余裕がないことは残念だが、中村教授はそれらの研究を重力波と結びつけるいくつもの斬新なアイデアもこれまでに提出している。それらの研究を通じての一般相対論・重力波研究の推進への貢献も多大である。

（大学院理学研究科）

勝又直也助教授は、平成6年東京大学文学部卒業、同10年にエルサレム・ヘブライ大学ヘブライ文学学科修士課程修了、同15年にエルサレム・ヘブライ大学ヘブライ文学学科博士課程修了、同年6月にエルサレム・ヘブライ大学Ph.D.を授与された。日本学術振興会特別研究員SPD（平成15年度）を経て、平成16年4月より京都大学大学院人間・環境学研究科助教授に就任された。



今回の受賞の対象となった業績は、中世ヘブライ文学を中心とした、地中海・中東の比較文学・比較文化研究である。従来日本でユダヤ学といえば旧約聖書学、近代ヨーロッパのユダヤ人問題、現代のイスラエル・パレスチナ問題との関連で研究されてきた。勝又助教授は中世ヘブライ文学という日本では未開拓の分野に取り組み、カイロ・ゲニザ写本群をもとに中世ヘブライ語で書かれた宗教詩を解説校訂するという地味な文献学的研究において、国際的な業績をあげた。文献学的研究と同時に、ユダヤ教、イスラーム教、キリスト教という3つの一神教の相

互影響関係という観点から、言語学、文学、宗教学などにわたる広範囲な文化交流史的研究をも一貫して推進してきた。

具体的には例えば、10世紀イラクで活躍したユダヤ詩人ネヘミヤ・ベン・シュロモーのヘブライ語典礼詩の校訂を通して、詩人の思想にシリア・キリスト教の影響を見だし、9世紀パレスチナのユダヤ詩人シュロモー・アルシンジャーリの典礼詩を校訂し、イスラーム教支配下におけるユダヤ教とキリスト教との親近・反発関係を分析した。また、10-11世紀パレスチナのユダヤ詩人シュムエル・ハシュリシの典礼詩のヘブライ語文体を分析して、地中海・中東各地のユダヤ人共同体間の言語文化的交流を解明した。とりわけ顕著な最近の文化交流史的研究としては、11-12世紀イスラーム圏においてアラビア語、ペルシア語、ヘブライ語、シリア語で創作された歌謡物語のジャンル「マカーマート」の研究がある。勝又助教授はこの研究において、ユダヤ教とキリスト教という非イスラーム少数派の「マカーマート」文学に表現された、アイデンティティにかかわる言語文化的葛藤を実証的に分析した。

（大学院人間・環境学研究科）

望月新一教授は、昭和63年に米国プリンストン大学数学科を卒業後、平成4年に同大学大学院数学科博士課程を修了して学位(Ph.D)を取得し、同年京都大学数理解析研究所助手に就任された。その後、平成8年に同研究所助教授に昇任、平成14年に同研究所教授に昇任されて現在に至っている。



同教授の専門は数論幾何であり、特に、 $p$ 進タイヒミュラー理論、遠アーベル幾何、ホッジ・アラケロフ理論など、双曲的代数曲線の数論幾何に関する多岐にわたる顕著な研究成果を挙げてこられたことが、今回の受賞の対象となった。

同教授が構築した $p$ 進タイヒミュラー理論は、古典的な複素数体上のタイヒミュラー理論の類似として、双曲的代数曲線とそのモジュライ空間の望ましい $p$ 進一意化理論を初めて与えたものである。曲線のモジュライ空間の標準座標、曲線の標準持ち上げ、曲線の数論的基本群の $PGL_2$ への標準表現、など斬新かつ基本的な対象たちが同教授により続々と発見

された。これらの結果は、約200ページの大論文(Publications of RIMS, 1996年)と500ページ超の大著(アメリカ数学会, 1999年)にまとめられた。

双曲的代数曲線の遠アーベル幾何におけるグロタンディーク予想は、中村博昭氏、玉川安騎男氏らによって部分的に解決されていたが、同教授はこれを完全に解決し、更に、 $p$ 進体上でも同様の結果が成り立つことを示した。この結果は、現在に至るまで遠アーベル幾何の最高峰をなしており、同教授は、この業績に関し、1997年度日本数学会賞秋季賞を(中村氏、玉川氏と共同で)受賞し、また、1998年には29歳の若さで国際数学者会議の招待講演を行った。

その後、同教授は、 $abc$ 予想などディオファントス幾何の重要未解決問題へのアプローチの一環として、楕円曲線のホッジ・アラケロフ理論という大理論を完成させた。現在は、更にこの研究を大きく発展させて、全く新しい圏論的な幾何学を構築中であり、この理論が完成した暁にはディオファントス幾何への著しい応用があることが期待されるため、内外の熱い注目を集めているところである。

なお、同教授は、日本学術振興会賞もあわせて受賞された。(数理解析研究所)

## 長尾 真前総長、竹市雅俊客員教授が日本国際賞を受賞

長尾 真前総長ならびに竹市雅俊生命科学研究科客員教授が、平成17年度日本国際賞を受賞されました。日本国際賞は、「ノーベル賞に匹敵する世界的な賞を日本で」という政府の構想から、昭和58年に創設されたもので、科学技術の分野で独創的・飛躍的な成果を上げ、科学技術の進歩に貢献した国内外の研究者・技術者に授与される国際的な賞です。

授賞式は、4月20日(水)に東京・国立劇場で天皇、皇后両陛下ご臨席のもとに執り行われました。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

長尾 真前総長は、昭和34年京都大学工学部電子工学科を卒業、同36年に同大学大学院工学研究科修士課程を修了後、京都大学工学部助手、講師、助教授を経て、同48年教授に就任し、有線通信工学講座を担当された。その後、平成8年大学院工学研究科に配置換えとなり、通信情報工学講座を担当された。昭和61年から平成2年まで大型計算機センター長、平成4年から同6年まで評議員、同7年から同9年まで附属図書館長、同



8年から同9年まで総長特別補佐、同9年から工学研究科長・工学部長など学内の要職を歴任された後、平成9年12月第23代京都大学総長に就任され、6年間総長として大学の管理・運営に尽力された。平成15年12月任期満了により退官され、名誉教授の称号を受けられた。退官後は平成16年4月独立行政法人情報通信研究機構初代理事長に就任され、現在に至っている。

先生は、画像や言語という情報メディアを用いた知的な情報処理に関する研究に力を注ぎ、パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館の分野において多くの優れた研究成果を挙げて



こられた。中でも、自然言語処理、機械翻訳の分野では、先生は世界に先駆けて機械翻訳の研究を推進し、日英、英日翻訳システムを完成・実用化させるとともに、機械翻訳に用例を用いる新しい翻訳方式を提案し、その後の機械翻訳研究に大きな影響を与えた。また、画像処理の分野では、フィードバック解析機構を導入した顔写真の認識システムや黒板モデルを用いたりモートセンシング画像などの複雑な自然画像の解析システムは、人工知能的手法による

画像処理の分野を開拓したものとして国際的に大きな影響を与え、その後の研究に大きく貢献した。その後、これらの研究成果の上に立ち、マルチメディア情報処理、デジタル通信機能を包含した総合的情報処理システムとして電子図書館の研究を行い、そのプロトタイプシステムを開発し、図書館の情報化の推進にも貢献した。このたびの受賞は、このような幅広い先生の自然言語処理及び画像の知的処理に対する先駆的な貢献が高く評価されたものである。

竹市雅俊客員教授は、昭和41年名古屋大学理学部生物学科卒業、同45年京都大学理学部助手となり、同61年同教授に就任後、平成7年大学院理学研究科に配置換え、そして同11年同大学大学院生命科学研究科の創設に際し細胞認識学分野の教授に就任された。その後、平成14年生命科学研究科分子病態学分野（連携講座）に就任された。この間、平成5年から7年間、理学部附属分子発生生物学研究センター長を併任、同12年より理化学研究所発生・再生科学総合研究センター長を兼務され、そして同14年より研究の拠点を同センター内に置かれている。



竹市客員教授は、長年にわたり動物細胞間の接着・認識機構の研究を行い、この分野において国際的に常に先導的な役割を果たされている。竹市客員教授は、細胞同士の接着のために2種類の機構（カルシウム依存性機構とカルシウム非依存性機構）が存在することを見出されたのみならず、カルシウム依存性細胞接着の実体であるカドヘリン接着分子ファミリーを発見された。そしてカドヘリンは細胞

間接着のために必須であると同時に、選択的な細胞認識の担い手でもあり、多細胞体制の形成・維持に極めて重要な役割を果たすことを明らかにされた。カドヘリンの機能は種々の細胞質因子によって制御されており、カドヘリンの発現レベルや機能制御の異常がガン細胞の転移に関与することから、発生生物学のみならず医学分野からも多くの注目を集めている。また、最近ではカドヘリンが神経細胞シナプスに存在することを証明され、神経回路形成の分子機構の解明に向かって研究を展開されておられる。これらの業績に対し、平成13年国際発生生物学会ロス・ハリソン賞を含む数々の国内外の賞を授与され、同10年には日本学士院会員に選出された。さらに同16年文化功労者として顕彰されておられる。

竹市客員教授のご興味は御自身の細胞生物学の分野に留まらず、昆虫学から神経生理学の分野まで多岐にわたっている。実験室内のそして自然界での様々な生命現象に対して、「不思議だ!」とか「面白い!」と素直に感動される少年のような純粋な心は、科学者の本質であると同時に先生の英知の源の1つである。益々のご研究のご発展をお祈り申し上げます。

(大学院生命科学研究科)

## 木村健二教授が文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を、 4名の教員が若手科学者賞を受賞

このたび、木村健二工学研究科教授が、平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を、東 正樹化学研究所助教授をはじめ4名の教員が若手科学者賞を受賞され、4月20日（水）に、虎ノ門パストラルにおいて授賞式が行なわれました。科学技術賞（研究部門）は、我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は開発を行った者を、若手科学者賞は高度な研究開発能力を有する若手研究者を表彰の対象としています。

以下に木村教授の経歴、業績等とともに、両賞の受賞者を紹介します。

木村健二教授は、昭和51年京都大学理学部を卒業後、同大学大学院理学研究科修士課程を修了され、同53年に博士課程進学の後、同大学工学部助手、助教授を経て、平成11年教授に就任され、ナノサイエンス講座を担当されている。この間に、平成14年に日本表面科学会技術賞、同16年に市村学術賞を受賞されている。



フォード後方散乱法」の開発に関する研究である。木村教授は、表面分析法として広く利用されているラザフォード後方散乱法の深さ分解能を、2桁近く向上させることにより、世界で初めて原子層ごとの分析を可能とする高分解能ラザフォード後方散乱法を開発した。本成果は、物質の原子レベルでの解析を可能とし、物質の機能発現機構の解明を促し、新機能性物質の創成等、科学技術の進展に寄与することが期待されている。

(大学院工学研究科)

今回の受賞の対象となった業績は「高分解能ラザ

### 平成17年度文部科学大臣表彰科学技術賞 研究部門

| 氏 名   | 所 属         | 業 績 名                    |
|-------|-------------|--------------------------|
| 木村 健二 | 大学院工学研究科 教授 | 高分解能ラザフォード後方散乱法の開発に関する研究 |

### 平成17年度文部科学大臣表彰若手科学者賞

| 氏 名   | 所 属                            | 業 績 名                        |
|-------|--------------------------------|------------------------------|
| 東 正樹  | 化学研究所 助教授                      | 固体化学分野における高压合成法を用いた機能性酸化物の研究 |
| 王 英正  | 医学部附属病院探索医療センター<br>探索医療開発部 助教授 | 再生医療分野における心筋細胞再生の研究          |
| 篠原 隆司 | 大学院医学研究科遺伝医学講座<br>分子遺伝学分野 教授   | 生殖工学分野における精子幹細胞長期培養系の研究      |
| 八十田明宏 | 医学部附属病院内分泌代謝内科<br>助手           | 骨分野におけるCNP／GC-B系の意義と臨床展開の研究  |

### 成宮 周教授が紫綬褒章を受章

このたび、我が国学術の発展のため顕著な功績を挙げたことにより、成宮 周医学研究科教授が、平成17年4月29日に紫綬褒章を受章されました。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

成宮 周教授は、昭和48年京都大学医学部医学科を卒業、同50年に同大学院医学研究科博士課程に進学、同54年に医学博士の学位を授与されている。昭和54年英国ウエルカム研究所研究員、昭和56年京都大学医学部助手、同



63年同助教授、平成4年教授となり、神経・細胞薬理学講座を担当して現在に至っている。平成16年10月より京都大学医学研究科長・医学部長に就任し、医学教育・研究の推進、法人化後の大学の整備に尽力されている。学外では、日本生化学会会長、日本薬理学会理事などを務め、文部科学省科学技術・学術審議会専門委員、日本学術振興会総合研究連絡会議委員などを歴任し、我が国の学術と科学技術振興

に大きく寄与してこられた。

成宮教授は、薬理学の領域で顕著な業績を挙げ、この領域における著書および論文は330編に及んでいる。研究分野は、大別して 1. 炎症、痛み、発熱などの病態の形成に働くプロスタグランジン(PG)の作用機構の研究と 2. 低分子量G蛋白質Rhoのシグナル伝達に関する研究がある。前者では、PG作用を介達する全8種の受容体を同定、個々の受容体を欠損したマウスを作成して、各々の受容体の個体の生理、病態生理での働きを解明した。これにより、炎症、痛み、発熱などの病的症状、骨形成、大腸ガンの進展などに関与するPG受容体を明らかにし、PGを介する陣痛招来、止血・血栓形成、免疫、アレルギーの調節機序を明らかにした。後者では、Rhoを特異的に不活化するボツリヌスC3酵素やRhoの

標的であるROCKキナーゼの特異的阻害薬を発見し、これらを用いて、Rhoを介する細胞接着・移動・収縮や細胞質分裂のシグナル伝達経路を解明した。また、この経路が、高血圧の発現、細胞の癌化、癌細胞の転移などに働いていることを明らかにした。これらの研究は、いずれにおいてもその分野の基盤を形成し、基礎医学、臨床医学の双方に大きな影響を及ぼしているものである。

これら一連の業績に対し、平成10年に大阪科学賞、平成11年に武田医学賞、エルウィン・フォン・ベルツ賞、平成12年に Fondazione Giovanni Lorenzini Gold Medal、平成14年に上原賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

(大学院医学研究科)

## 日誌

2005.3.1～3.31

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 3月1日 部局長会議   | 17日 企画委員会                            |
| 2日 総長と職員組合との懇談   | 〃 学術情報システム整備委員会                      |
| 4日 全学共通教育システム委員会                                       | 〃 職員組合との団体交渉                         |
| 7日 役員会   | 22日 役員会                              |
| 〃 学生部委員会   | 〃 放射性同位元素等管理委員会                      |
| 8日 教育研究評議会   | 23日 修士学位・修士（専門職）学位授与式                |
| 〃 財務委員会  | 〃 博士学位授与式                            |
| 9日 企画委員会   | 24日 卒業式                              |
| 〃 京都地域留学生交流推進協議会総会                                     | 〃 入学者選抜方法研究委員会                       |
| 13日 入学試験（後期）（14日まで）                                    | 〃 中国, Liu Jingnan 武漢大学長, 総長他と懇談      |
| 14日 役員会  | 25日 部局長会議                            |
| 15日 教職教育委員会  | 〃 財務委員会                              |
| 〃 経営協議会  | 28日 教育研究評議会                          |
| 16日 国際交流会館委員会  | 〃 役員会                                |
| 〃 国際交流委員会  | 29日 中国, Gu Binglin 清華大学長 他2名, 総長他と懇談 |
| 〃 タイ, Numyoot Songthanapitak ラジャマンガラ工科大学長 他13名, 総長他と懇談 | 30日 広報委員会                            |
| 17日 医療技術短期大学部卒業式・修了式                                   | 31日 役員会                              |



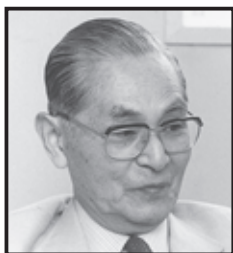
## 訃報

このたび、塚本 <sup>つかもと</sup> 洋太郎 <sup>ようたろう</sup> 名誉教授、河合 <sup>かわい</sup> 弘廸 <sup>ひろみち</sup> 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

## 塚本 洋太郎 名誉教授



塚本洋太郎先生は、3月12日逝去された。享年93。

先生は、昭和12年京都帝国大学農学部農学科を卒業、同大学農学部助手、大阪府立園芸学校教諭、大阪農業専門学校教授、浪速大学教授を経て、昭和27年京都大学農学部教授に就任、蔬菜花卉園芸学講座を担当された。昭和50年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和28年12月から同30年12月まで京都大学農学部附属農場長、同44年12月から同46年12月まで評議員を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和53年4月から同60年3月まで

南九州大学教授として同大学の発展に尽力された。

先生は花卉園芸学、中でも植物ホルモンに関する研究において優れた研究業績を残され、園芸植物の休眠打破や開花調節の研究において多大の貢献をされた。この業績に対して、昭和49年4月日本農学賞が授与された。多数の植物図鑑を執筆され、さらに、古代からの美術品や古文書を含め膨大な資料・文献を調査され、花卉の文化史を論考された。その成果は主著『花卉総論』にまとめられている。

また、先生は数々の学術団体・協会の会長職を歴任された。これら一連の研究教育活動、社会貢献により、昭和59年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院農学研究科)

## 河合 弘廸 名誉教授



河合弘廸先生は、4月1日逝去された。享年85。

先生は、昭和18年東京工業大学紡織科を卒業、東洋紡績株式会社勤務、京都帝国大学助手、京都大学工学部講師、助教授を経て同39年教授に就任、高分子化学教室高分子力学講座を担当された。昭和58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は昭和58年から同63年まで兵庫教育大学教授に、同63年から平成6年まで文化女子大学教授に就任され、教育研究活動を続けられた。

先生は高分子科学、中でも高分子力学および高分

子固体物性に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、研究者の養成に情熱を傾けられた。

また、繊維学会、高分子学会、日本繊維機械学会、日本材料学会、および日本レオロジー学会などにおいて、会長、理事、支部長等の要職を歴任された。これらの教育研究活動、学会活動に対して、昭和52年高分子学会より、同56年繊維学会よりそれぞれ功績賞を、同58年に日本化学会賞、日本レオロジー学会賞を、同62年に米国物理学会高分子物理学賞、さらに平成7年11月には勲二等瑞宝章と、多くの賞と栄誉を受けられた。

(大学院工学研究科)

## 話題

## 京都大学附置研究所シンポジウムを開催

国立大学は平成16年度より法人化され、それに先立って大学院重点化に加え大学附置研究所の在り方を根底から問われる状況にある。宇治地区研究所群はそれへの答えとして、広範かつ高度な研究能力を俯瞰的・創造的に融合・活用し、安全・快適・高度で持続可能な社会の構築をリードするフロンティアサイエンス「生存基盤科学」の創成を図ってきた。このような取り組みを検証・洗練し、理工系附置研究所の将来展開のモデルとして確立するための事業として、3月9日(水)～10日(木)2日間にわたり、宇治地区4研究所長の司会のもと、「京都大学附置研究所シンポジウム」を開催した。

学内の附置研究所および研究センターは、全国的あるいは国際的研究中枢としての役割を果たしており、その存在意義は単に学内、国内に留まらない。そういった中で外国の研究所や国内の法人化された研究機関の代表者が集って討議することにこのシンポジウムの意義がある。

初日は午前11時より、宇治地区部局長会議世話部局長の松本 紘生存圏研究所長による開会挨拶があり、尾池和夫総長の挨拶の後、引き続き来賓の有本



建男文部科学省技術・学術政策局長、北澤宏一科学技術振興機構理事、土岐 博大阪大学核物理研究センター長およびフランス国より招へいしたジャンルイ・ブジュン パリ天文台宇宙天体物理研究所長の講演があった。その他学内附置研究所から4研究所長の講演並びに宇治地区4研究所の教授2名が講演を行った。2日目の午後3時30分からは「生存基盤科学の創成に向けて」と題してパネルディスカッションが行われ侃々諤々の議論が戦わされた。両日も百名以上の参加者を得て盛況のうちに終了した。

(宇治地区事務部)

## 人文科学研究所が第1回「TOKYO漢籍SEMINAR」を開催

人文科学研究所では、文部科学省の後援により3月12日(土)、学術総合センター会議場において第1回「TOKYO漢籍SEMINAR」を開催した。

本研究所では、これまで夏期公開講座、開所記念講演会等の公開講演会を催し、一般市民に向けて啓蒙活動を積極的に行ってきた。また、附属漢字情報研究センター(旧東洋学文献センター)においても、昭和47年以降、文部科学省(旧文部省)との共催で漢籍担当職員講習会を実施している。初級と中級の2コースをもつこの講習会は、漢籍整理に関する基

礎知識を学ぶことのできる希有な場として、全国の大学および公共図書館から毎年多数の受講申し込みをいただいているが、図書館職員のみを対象とし、さらに実習を伴うことにより受講人数を制限せざるを得ない状況である。こうした現状に鑑み、まったく新しい視点に立って、より多くの人々を対象とした漢籍に関する講演会を開いてはどうかという文部科学省からのアドバイスをいただき、また本研究所としてもその必要性を強く感じていたので、上記のセミナーを立ち上げるに至った次第である。



本セミナーの目的は、京都大学人文科学研究所が70年以上にわたって蓄積してきた中国学研究成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関する理解を深めてもらおうとするものである。講演を中心とするセミナー形式により毎年3月に東京で開催することとし「漢籍」の二文字を際立たせるために、「TOKYO 漢籍 SEMINAR」と銘打った。

当日は、森 時彦所長の開会挨拶に始まり、『古いけれども古びない 歴史があるから新しい\*\*\*漢籍はおもしろい\*\*\*』をテーマに、富谷 至教授「書写の文化史」、船山 徹助教授「漢訳仏典の成立」、井波陵一教授「使えない字－諱と漢籍」の講演が行われた。どの講演も興味深く、わかりやすく、おもしろかったという感想を頂いただけでなく、武田時昌教授の名司会が親しみやすく、10時30分から16時までという長時間にもかかわらずなごやかなうちに終了した。

今回のセミナーには、一般・学生・図書館関係・教育関係者から予想を上回る140名以上の申込みがあり、次回を期待される声のみならず、上記の漢籍担当職員講習会にも参加したいという希望まで寄せられたことは、まことにうれしいかぎりである。

(人文科学研究所)

## 高等教育研究開発推進センター「第11回大学教育研究フォーラム」の開催

高等教育研究開発推進センターは、3月22日(火)・23日(水)の2日間にわたり、吉田南構内吉田南1号館および時計台記念館において、平成16年度特色ある大学教育支援プログラム「相互研修型FDの組織化による教育改善」の一環として「第11回大学教育研究フォーラム」を開催した。

フォーラムは大会企画フォーラム、研究部会、実践交流部会、総括講演、ラウンドテーブルで構成され、初日の大会企画フォーラムでは、「大学教育評価－評価する側の論理－」をテーマに、高等教育研究開発推進センターの大塚雄作教授及び林 哲介教授(副センター長)の司会進行により、尾池和夫総長の挨拶に始まり、大塚教授の趣旨説明があった。続いて、木村 孟大学評価・学位授与機構長による「今日の大学評価」についての基調講演を受けて、前田早苗大学基準協会大学評価・研究部部長心得、吉田 文メディア教育開発センター教授、奈良 哲文部科学省高等教育局国立大学法人評価委員会室長、松下佳



代高等教育研究開発推進センター教授の4氏によるパネルディスカッションがあり、その後、参加者との意見交換がなされた。

一方、研究部会及び実践交流部会では、2日間にわたり13の会場で計42名による個人研究発表があり、また、総括講演は4会場で、美濃導彦学術情報メディアセンター教授を始めとし、宇佐美寛千葉大学名誉教授、田口真奈メディア教育開発センター助教授、大塚教授、竹内 洋教育学研究科教授、高木晴



夫慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授、縄田裕幸島根大学教育学部助教授、荒井克弘東北大学大学院教育学研究科教授の計8名による講演が行われた。



フォーラム最後のラウンドテーブルでは、「相互研修型FDの組織化による教育改善（中間成果報告）」、「心理学者、導入教育への挑戦－動機づけ、学習過程、自己形成の観点から－」、「大学生心理学の構築－青年心理学と大学教育学の架橋－」をテーマに3会場で討論が交わされた。

このフォーラムには2日間で学内外から約550名の参加者があり、終始活発な議論、意見交換がなされ、また1日目終了後開催された懇親会にも多数の参加者があり、一層の交流を深めるなど、盛会のうちに終了した。

（高等教育研究開発推進センター）

## 高等教育研究開発推進センター・京都大学教育交流会プロジェクト 第1回京都大学・大阪大学合同イベント ―大学が変わる みんなで変える―の開催

高等教育研究開発推進センターは、4月23日（土）、吉田南構内人間・環境学研究科大講義室において、学生、教職員、一般参加者等約120名の参加を得て、同センターと大阪大学大学教育実践センターとの協同による「第1回京都大学・大阪大学合同イベント―大学が変わる みんなで変える―」を高等教育研究開発推進機構の後援により開催した。

京都大学教育交流会プロジェクトは、学生と教職員の協働により新たな本学の教育と学生の知の探求の在り方を追究することを目的に活動しており、今回の大阪大学との合同イベントは、「他大学との比較を通じた“京大らしさ”の模索」をテーマとして企画されたものである。

本イベントは、大阪大学法学部4回生 茂木ゆのかさんの司会進行のもと、丸山正樹副学長からの歓迎の言葉に始まり、本学工学部4回生 北村恭子さんによる趣旨説明に続いて、第Ⅰ部「研究のおもしろさとは？」においては、本学 小田伸午教授「運動科学」、大阪大学 藤田佳孝助教授「物理学」の両大学を代表する人気講義が開講された。第Ⅱ部に



においては、「大学を100倍活用する方法」をテーマとするパネル討論が行われ、北村恭子さんによるコーディネイトのもと、両大学の学生パネリストと会場の参加者として活発な議論が交わされた。最後に高杉英一大阪大学大学教育実践センター長による挨拶で締め括られ、盛会のうちに終了した。

また、イベント終了後開催された懇親会においても多数の学生、教職員等が参加し、一層の交流を深めた。

（高等教育研究開発推進センター）

## 医学部附属病院で「看護師が自ら看護服をデザインし着用」

医学部附属病院では、4月1日より看護師が自らデザインした看護服を着用している。

制服作成のため、看護師が自らユニホーム委員会を立ち上げ、京大病院の基本理念の一つである「患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。」という主旨に基づいて特に機能性を重視してデザインしたものである。

従来のもとは異なり、患者さんへの介助、診療時にパンタロン、スカートの生地が伸縮するといった機能的なもので職員からも評判もよく親しまれている。特に職員からは「着心地がよい」「制作をとおしてより京大病院職員としての連帯感が深まっ

た。」「自ら作り上げることができたという自信とモチベーションを高めることができた。」また、患者さんからは「目新しくてファッション的です。」という意見などが聞かれた。

(医学部附属病院)



看護服の上着は、白とピンク  
下は、伸縮式の紺のスカートかパンタロン

## 公開講座

### 法学研究科21世紀COEプログラム連続市民公開講座

1. 日時と会場：6月18日（土） 13：00～16：00 ホテルグランヴィア京都5階「古今の間」
2. 演 題：第2回連続市民公開講座 『秩序のかたちと揺らぎ』
3. 講 演 者：大石 眞 『憲法改正と憲法改革との間』  
木村 雅昭 『覇権の構造——現代アメリカと大英帝国』
4. 参 加 費 用：無料・お飲物代として500円。
5. 定 員：先着100名
6. 申 込 方 法：下記のHPの申込書をメールかFAX又は郵送でお送り下さい。  
<http://lp21coe.law.kyoto-u.ac.jp/>
7. 申 込 締 切：6月16日（木）
8. 申 込 先：〒606-8501京都市左京区吉田本町  
大学院法学研究科COE事務局  
E-mail：lp21coe@peach.ocn.ne.jp FAX：724-6173
9. お問合せは下記の担当まで：  
lp21coe@peach.ocn.ne.jp（寺井）

## お知らせ

### 上海センター・シンポジウム 日中間の"政冷経熱"をどう打開するか

1. 日 時：7月1日（金）14：00～18：00
2. 場 所：時計台記念館百周年記念ホール
3. 報 告 者：時 殷弘（中国人民大学国際関係学院教授，アメリカ研究センター主任教授）  
高井 潔司（北海道大学国際広報メディア研究科教授，元読売新聞北京支局長）  
竹内 實（京都大学名誉教授）
4. 司 会：本山 美彦（京都大学経済学研究科教授）
5. 参 加 費 用：無料
6. 申 し 込 み：不要
7. 問い合わせ先：大学院経済学研究科  
上海センター副センター長 大西 広 TEL 753-3465  
詳細はホームページをご覧ください。  
<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~shanghai/oshirase.htm>

### 大学院生のための教育実践講座 ―大学でどう教えるか―

この実践講座は、本学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることを目指し、高等教育研究開発推進センターが主体となって実施するものです。

1. 開 講 日：8月4日（木）10：00～（受付 9：00～）
2. 場 所：時計台記念館
3. 参 加 費：2,000円（当日，受付で徴収します。）
4. 参加人数：100名程度
5. 申込締切：6月30日（木）
6. 申込方法：メール又はFAXで申し込んでください。（申込様式はホームページに掲載しています。）
7. 申 込 先：学生部教務課教務掛  
E-mail：kyomu56@mail.adm.kyoto-u.ac.jp  
FAX：753-2485  
詳細は、ホームページをご覧ください。  
[http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05\\_event/2005/050804.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2005/050804.htm)
8. そ の 他：参加者には「修了証」を授与します。



## 平成17年度創立記念行事音楽会の開催

本学では、6月18日の創立記念日を祝し、下記のとおり音楽会を開催いたします。  
本学学生・教職員の来聴を歓迎します。

名 称 圧倒的な音と響きの洪水  
京大が生んだ気鋭のアーティスト  
大井浩明のパイプオルガンコンサート

演 奏 者 大井 浩明

日 時 平成17年6月16日(木) 開場：17:30  
開演：18:30  
終演：20:30(予定)

会 場 京都コンサートホール(大ホール)(京都市左京区下鴨半木町1-26)

プログラム

《第一部》(約40分)

J. S. バッハ : 「トッカータとフーガ ニ短調 BWV565」  
J. S. バッハ : 「トリオ・ソナタ 第5番 ハ長調 BWV529」  
I. クセナキス : 「グメーオール」  
――休憩(20分間)――

《第二部》(約40分)

河合 拓始 : 委嘱新作・世界初演  
C. M. ヴィドール : 「オルガン交響曲 第6番 ト短調 OP42-2」



## 演奏者略歴

大井 浩明 Hiroaki OOI

京都市生れ。独学でピアノを始める。京大工学部在籍中は、音楽部交響楽団・音楽研究会・観風会・ギター部・アフリカ研究会・自転車同好会「ちゃりんこチエ」等に所属。

スイス連邦政府給費留学生ならびに文化庁派遣芸術家在外研修員としてベルン芸術大学(スイス)に留学、ピアノと室内楽をブルーノ・カニーノに学ぶ。同音大大学院ピアノ科ソリストディプロマ課程修了。また、チェンバロと通奏低音をディルク・ベルナーに師事、同大学院古楽部門コンツェルトディプロマ課程も修了した。アンドラーシュ・シフ、ラーザリ・ベルマン(以上ピアノ)、ルイジ・フェルディナンド・タリアヴィーニ(バロック・オルガン)、ミクローシュ・シュパーニ(クラヴィコード)等の講習会を受講。

ガウデアムス国際現代音楽演奏コンクール(1996/ロッテルダム)、メシアン国際ピアノコンクール(2000/パリ)に入賞。朝日現代音楽賞(1993)、アリオ賞奨励賞(1994)、青山音楽賞(1995)、村松賞(1996)、出光音楽賞(2001)等を受賞。シャルル・デュトワ指揮NHK交響楽団、クリスティアン・アルミンク指揮新日本フィルハーモニー交響楽団、高関健指揮東京都交響楽団、井上道義指揮京都市交響楽団、沼尻竜典指揮東京シティフィルハーモニー交響楽団、バク・ウンソン指揮仙台フィルハーモニー等のほか、ヨーロッパではバイエルン放送交響楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポラン(パリ)、ドイツ・カンマーオーケストラ(ベルリン)、アンサンブル・アスコ(アムステルダム)等と共演。《ヴェネツィア・ビエンナーレ》、《アヴィニョン・フェスティヴァル》、《ハノーファー・ビエンナーレ》、《ムジカ・ヴィヴァ》、《パン・ミュージック・フェスティヴァル(ソウル)》等多数の音楽祭に出演。

仏TIMPANIレーベルでの『クセナキス管弦楽全集』シリーズには2002年から参加、アルトゥーロ・タマヨ指揮ルクセンブルク・フィルと共演したCD《シナファイ》は異例のベストセラーとなり、仏ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック誌"CHOC"グランプリを受賞した。昨年秋には第2協奏曲《エリフソン〜ちはやぶる大地》世界初録音が同レーベルからリリース、また《エオント》を含む独奏曲集や第3協奏曲《ケクロプス》の録音も予定されている。

近年は歴史的鍵盤楽器の演奏にも力を入れ、J. S. バッハ《クラヴィア練習曲第三巻》(ドイツ・オルガン・ミサ)全曲によるオルガン・リサイタル、クセナキスのチェンバロ協奏曲《ゴレ島へ》のドイツ語圏初演、デュドゥランジュ・オルガン・フェスティヴァルへの出演、16〜17世紀の初期バロックに焦点をあてたチェンバロ・リサイタル等を行う。今シーズンはJ. S. バッハ《平均律クラヴィア曲集第1巻》によるクラヴィコード・リサイタルを各地で行い、好評を博している。ブログサイト：<http://ooipiano.exblog.jp/>

## 作曲者(第2部で演奏される世界初演作品)略歴

河合 拓始 Takuji Kawai

1963年神戸生れ。4歳よりピアノを学ぶ。1988年京都大学経済学部卒業。在学中より自作自演や即興演奏等の活動を始める。1991年東京芸術大学大学院修士課程(音楽学専攻)修了。ジョン・ケージ作品等の現代音楽コンサートや、即興演奏ライブ、サウンドパフォーマンス、ロックバンドへの参加のほか、ダンス・映像・朗読等とのコラボレーションも多い。2000年、コンサートシリーズ〜SARDINE〜(全5回)を主宰。即興演奏家として、フリージャズのサニー・マーレイ(ドラムス)、豊住芳三郎(ドラムス)らとも共演、同じく世界的な即興ドラマー、ハン・ベニングにも高い評価を受けた。CDに＜ジュエリー＞2000、＜Live at Artland vol. 1 & 2 / 河合拓始・池上秀夫・清水浩＞2001、＜ピアノ・プラトーン＞2002等。公式サイト：<http://kaerurec.jp/kawai/>

- 備 考
1. 入場無料(入場の際は、本学学生証または職員証を呈示してください。)
  2. プログラムは当日会場で配布します。
  3. 定員は1,600名先着順とします。演奏中は入場できません。
  4. 問い合わせ先：学生部学生課課外教養担当 TEL 内線2511 又は 2588

(学生部)

## 編集後記

5月に開催された広報委員会において、各広報誌の編集体制の見直しが行われ「京大広報」の編集という大役を総務部広報課が担当することになりました。この「京大広報」は大学の動きや部局の動きなどを教職員・学生に紙媒体で伝える唯一の広報誌です。この重要な使命を果たせるよう努めていきたいと思っておりますので、掲載情報の提供など皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

## 【訂正】

前号(No. 600)計報欄(1898ページ)1行目の「増田 稔名誉教授」は「増田 稔教授」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。